

実践的コミュニケーション能力の育成を図る指導計画の工夫改善

年間指導計画の工夫改善

年間指導計画は、単なる時数配当表や教科書の進捗を確認する表ではありません。これは、3年間を通してコミュニケーション能力の基礎が生徒に身に付くよう、言語活動の段階的な高まりや4領域の付けたい力のバランス等を考慮し、どのように重点化を図りどう指導していくのかという、教師の意図的な指導の計画でなくてはなりません。

また、各学校において、どの生徒にもコミュニケーション能力の基礎が身に付くよう、学校としての年間指導計画を作成し、英語科として共通理解を図りながら指導を行っていくことが大切です。

(平成14年度に作成した自校の年間指導計画を以下のような視点で振り返ってみましょう。)

- 1 年間指導計画に必要な要素が位置付けられていますか。
- 2 付けたい力を明確にした年間指導計画になっていますか。
 - (1)学習指導要領に示された言語活動の指導事項が具体化され、位置付いていますか。
 - (2)コミュニケーションを図る姿が3年間の発達段階に応じてイメージされていますか。
 - (3)3年間を通して、4領域の指導事項の重点化が図られていますか。
 - (4)言語活動の段階的な高まりが意図されていますか。
- 3 選択教科としての「外国語」において、学校独自の年間指導計画はありますか。

1 年間指導計画に必要な要素

年間指導計画を作成する趣旨を踏まえると、以下の事柄が必要な要素として考えられます。

- ・ 単元名、教材名
- ・ 指導時期
- ・ 重点とする領域と「付けたい力」
- ・ 重点とする言語活動
(言語活動のタイプとトピック 例 スピーチ = “My Dream”)
- ・ 言語の使用場面と働き
- ・ 主な言語材料
- ・ 評価規準、評価方法等
- ・ 配当時数

2 付けたい力を明確にした年間指導計画

(1) 4領域の言語活動の指導事項が具体化され、位置付いていること

授業において、生徒に指導する内容が曖昧になっていることはありませんか。私たち英語教師が3年間を通して、何をこそ生徒に指導するのかを具体的にもつことが大切です。

す。学習指導要領に示されている4領域の言語活動の指導事項について分析をし、具体化した例を参考資料として載せました。この具体例を活用して、指導計画に位置付けてみましょう。

【参考資料 - 1 ~ - 4「各領域の指導事項の具体例」】

(2) コミュニケーションを図る姿が3年間の発達段階に応じてイメージされていること

今回の学習指導要領では、弾力的な指導ができるように、4領域の言語活動の指導事項が、3学年間を通して一括して示されています。そこで、各学校の生徒の実態に応じて、学年ごとに目指すコミュニケーションを図る姿を教師自身がイメージをすることが大切です。

その際に、各学年の発達段階を考慮するとともに、系統性を大切に設定すること、生徒の学習の習熟の程度に応じて、必要な内容を繰り返し指導することを配慮し、学校の独自性のある年間指導計画になっていることが望まれます。

(3) 3年間を見通して4領域の指導事項の重点化が図られていること

指導事項の具体化と教科書教材の分析（文章の種類、言語材料、言語の使用場面、言語の働き）をもとに、各単元で、どの領域を重点として生徒に技能を身に付けさせるのかを考えて、指導計画が作成されていると思います。

そこで、意図されている重点化について以下の視点から見直してみましょう。

1つの単元において、実際のコミュニケーションを意図して、4領域の言語活動の関連を図りながら重点化すること

音声によるコミュニケーション能力を重視することから、「聞くこと」「話すこと」の言語活動が3年間を通して重視されていること

3年間を通して、4領域の指導事項を適切に指導するために、重点とする領域を縦軸、教科書の3年間のユニット（レッスン）を横軸にしてマトリックスを作成し、重点とする領域に や を付けた表を作成するののも一つの方法です。

【参考資料 「指導事項と教材のマトリックス」】

(4) 言語活動の段階的な高まりが意図されていること

生徒の学習段階を考慮して、以下のような言語活動の段階的な高まりを意図した年間指導計画になっているかを見直してみましょう。

【第1学年】自分の気持ちや身の回りのできごとを聞いたり、話したりする言語活動

【第2学年】事実関係や物事について判断したことを伝え合う言語活動

【第3学年】様々な考えや意見を出し合い、理解を深めたり主張したりする言語活動

【参考資料 「言語活動のタイプ」】

3 学校独自の選択教科の年間指導計画があること

選択教科の学習活動としては、生徒の特性等に応じた多様な学習活動が展開できるように、課題学習、コミュニケーション能力の基礎を培う補足的な学習、発展的な学習などが例示されています。従って、学習指導要領に示された時数の幅（1年：0～30、2年：50～85、3年：105～165）において、基本的な内容を踏まえ、学校の創意工夫を生かした活動がわかるような年間指導計画になっているかを見直すことが大切です。

単元指導計画の工夫改善

単元指導計画は、その単元において、コミュニケーションを図る具体的な姿をイメージし、教師が「いつ」「何を」「どのように」指導するかを明確に構想し、意図的、計画的に指導するために作成するものです。そこで、単元の指導目標を明確にし、それを達成するために、単元の終末に向けて、各単位時間の指導目標を明確にし、指導の構想を練ることが大切です。また、繰り返し練習するような学習活動と自分の気持ちや考えなどを伝え合うような言語活動のバランスを考慮して、学習過程を工夫することや、単元や単位時間の指導目標が達成できたかどうかを評価するために、評価規準を明確にすることも欠かせません。

(平成14年度に作成した自校の単元指導計画を以下のような視点で振り返ってみましょう。)

- 1 単元指導計画に必要な要素が位置付けられていますか。
- 2 指導目標と評価規準を明確にした単元指導計画になっていますか。
 - (1)指導目標が学習指導要領に示された目標や内容、教師の願い及び生徒の実態を踏まえ明確になっていますか。
 - (2)各単元において付けたい力が獲得できるような言語活動が位置付いていますか。
 - (3)各単元で付けたい力は、生徒の実態を踏まえ、段階的に高まるようになっていますか。
 - (4)単元の終末における生徒がコミュニケーションを図る姿が具体的にイメージされていますか。
 - (5)単元の指導目標に対応した評価規準が位置付いていますか。
 - (6)各単位時間のねらいと具体的な評価規準が位置付いていますか。また、単元のねらい課題、言語活動、評価規準の一貫性が図られていますか。

1 単元指導計画に必要な要素

単元指導計画を作成する趣旨を踏まえると、以下の事柄が必要な要素として考えられます。

- ・ 単元名、教材名
- ・ 単元の指導目標
- ・ 中心となる指導事項と言語活動
- ・ 言語の使用場面と働き
- ・ 題材と言語材料
- ・ 単元における評価規準、評価方法等
- ・ 単位時間の計画（ねらい、課題、活動の概要、評価規準と方法等）
- ・ 配当時数

2 指導目標と評価規準を明確にした単元指導計画

- (1) 単元の指導目標が、4領域の指導事項、教師の願い及び生徒の実態を踏まえて、明確になっていること

単元の指導目標が、学習指導要領に記されている4領域の指導事項を踏まえたものに

なっているのか、また、現在指導している生徒の実態を踏まえたものになっているのかといった視点から見直すことが必要です。ここで言う生徒の実態とは、一般的な学習姿勢や「聞くこと」「話すこと」だけの実態ではなく、単元の指導目標に照らした実態のことです。

(2) 中心となる言語活動が、単元において付けたい力が獲得できるようなものであること

中心となる言語活動は、その単元において教師が意図する単元の指導目標が達成できるように工夫することが大切です。

また、言語活動を行う際に、言語材料についての理解や練習を行う活動と実際に言語を使用して「情報や相手の意向」や「自分の考え」などのメッセージや意味内容を伝え合うなどのコミュニケーションを図る活動とのバランスに配慮しながら指導にあたりたいものです。それが、学習指導要領で目指している実践的コミュニケーション能力の基礎を養うことにつながるのです。

(3) 単元において付けたい力が、終末の活動に向けて、生徒の実態を踏まえ段階的に高まるようになっていること

単元の終末に行う言語活動に向けて、単位時間ごとに言語活動を積み上げて行くことが大切です。終末の言語活動に向けて、段階的に技能や態度が高まっていくような言語活動を意図的に位置付けていかなければ、その単元において目指す技能や態度が生徒に身に付きません。

また、毎時間の授業の始めに「帯活動」を位置付け、単位時間の言語活動や終末の言語活動につながる活動を行うことも一つの方法です。このときに、ドリル学習など繰り返し練習する活動や伝え合うなどのコミュニケーションを図る活動のバランスを考慮した活動を工夫することが大切です。また、「帯活動」の時間は、単元で新しく学習する言語材料の習熟を図る時間としても活用できます。

「帯活動」において、対話活動を行う際には、コミュニケーションを円滑に進めるための様々な方法（つなぎ言葉を使う、うなずく、相づちを入れる、聞き取れなかった時に聞き返す等）を継続して指導していくことも大切です。

【参考資料 積極的に対話を進めるための表現】

(4) 単元の終末の活動においてめざす言語活動の姿が具体的にイメージされていること

教師自身が、終末の活動においてめざす言語活動の姿をできるだけ具体的にイメージすることが大切です。言語活動がペアによる対話活動であれば、具体的にどのような対話をイメージしているのか、またスピーチであれば、どのような英語を生徒に話させたいのか、具体的に教師が英文として描くことが大切です。そうすることで、授業が具体的になり、生徒に身に付けさせたいことがより明確になります。

以上のことに留意して、単元において、教師が「何を」「どのように」指導しようとしているのかを明確にするために、単元の指導構想を作成することも大切です。

【参考資料 単元の指導構想例】

(5) 単元の指導目標に照らして4観点の評価規準が位置付いていること

単元における評価規準は、観点別学習状況の4つの観点ごとに位置付けることが必要です。その際、それぞれの観点の趣旨を十分に理解して、以下の2つの考え方から具体

的に設定してあることが大切です。

『コミュニケーションへの関心・意欲・態度』 → ・言語活動への取組
→ ・コミュニケーションの継続

『表現の能力』 『理解の能力』 → 正確さ（言語規則の正しさ）
→ 適切さ（言語使用の適切さ）

『言語や文化についての知識・理解』 → ・言語についての知識
→ ・文化についての理解

【参考資料 評価規準 57例一覧表】

(6) 各単位時間のねらいとそれに応じた具体的な評価規準が位置付いていること

生徒一人一人にコミュニケーション能力の基礎を確実に身に付けさせるために、生徒の学習状況を適切に評価し、日々の授業を改善していくことは、教師にとって大切なことです。また、生徒にとっても、評価は自分が身に付けた力を自覚でき、次への意欲につながるものです。

したがって、評価規準は、「ねらいを明確にした指導をすること」や「生徒一人一人にきめ細かな指導を行うこと」を意図して設定されるものです。そこで、活動において、ねらいの達成状況が評価できるように、できるだけ具体的な評価規準を位置付けることが大切です。さらに、「単元や単位時間のねらい」「課題」「言語活動」に一貫性をもたせることも配慮することの一つです。

また、評価するだけでなく、それを生かして指導することが必要です。そこで、ねらいの達成が不十分な生徒に対してどのように指導するのか、指導の手だてを記すことも大切です。

このような視点から、これまでに作成した単元指導計画をもう一度、見直し、整備してみましよう。

【参考資料 単元指導計画の例】

<参考文献>

- ・ 中学校学習指導要領（平成10年12月）解説 外国語編 <文部省>
- ・ コミュニケーションを目指した英語の指導と評価（平成5年6月） <文部省>
- ・ WAYS OF TEACHING ENGLISH No.38～No.41 <岐阜県中学校英語科研究部会>
- ・ 評価規準の作成、評価方法の工夫改善のための参考資料
- 評価規準、評価方法等の研究開発（報告） - <国立教育政策研究所>